

夏に多い感染症

夏かぜは、子どもがかかるものと思われがちですが、1シーズンに何回か、かかる大人も少なくありません。
いずれの感染症も手洗いや“咳エチケット”、換気など基本的な感染症対策が重要です。

感染症の初期は、発熱や咳などで発症しますが、猛暑で体力や免疫力が低下すると、感染症リスクも高まります。
食事や水分が摂取できない、または、「変だな?」と思ったら、必ず医療機関に相談してください。

①ヘルパンギーナ

発熱と痛みが主な症状。特に乳児は脱水症に注意が必要です。便からウイルスが排泄されるのでおむつ交換の後には、しっかり手洗いしてください。

②手足口病

口の中や手足などに水疱性の発疹が出る感染症です。子どもを中心に感染し、稀に重症化することがあります。

③咽頭結膜熱

アデノウイルスの感染により、発熱、喉の痛み、結膜炎といった症状が数日続きます。感染者が使ったタオル等にウイルスを含んだ目やに、唾液、鼻水が付着しているので、タオルの共有は避けましょう。

感染対策のキホン

- ① 流水と石けんでの**手洗い**
- ② 触れるものに**アルコール消毒**
- ③ 可能な限り、**マスク着用**



百日せきに注意!

百日せきは、百日咳菌の感染によって、特有のけいれん性の激しい咳発作を特徴とする急性気道感染症です。乳児期早期から、り患する可能性があり、特に新生児や乳児期早期では、重症になり、肺炎や脳症を合併し、まれに死に至ることもあります。

カタル期(約 2 週間持続)

かぜ症状で始まり、次第に咳の回数が増えて程度も激しくなります。

けいがい期(約 2~3 週間持続)

発作性、けいれん性の咳が出るようになります。合併症として肺炎や脳症などもあり、乳児は注意が必要です。

回復期

激しい発作は次第に減衰し、やがて回復に向かいます。回復まで全経過で約 2~3 か月かかります。



予 防 と 対 策

百日せきの予防には、生後2か月から定期接種として摂取可能なら 5 種混合ワクチン (DPT-IPV-Hib) 等の摂取が有効です。

ただし、摂取後年数が経過した人等での発病も見られます。マスクの着用、手洗いなどの基本的な感染症対策を心がけましょう。

せきが続く場合は、
医療機関の受診を
ご検討ください。



TAKATSUKI
HANITAN